

書 評

加賀美雅弘編：『世界地誌シリーズ9 ロシア』
朝倉書店、2017年9月刊、176p., 3,400円（税別）

朝倉書店の『世界地誌シリーズ』の最新刊として、待望の『ロシア』が刊行された。執筆者は、編者の加賀美雅弘を含め計8名からなる。

評者は、モスクワとサンクトペテルブルクを訪れたことがある程度で、ロシアについての知識は乏しい。だからこそ、かえって一般の読者に近い目線で、本書を読んできた。

本書は12章から構成されている。まず、「1. 総論—ロシアの地域形成とその特性」では、編者の加賀美が本書のねらいを説明する。ソ連時代の計画経済によって、社会・経済の均質化が顕著になっていたが、ソ連崩壊後の自由主義体制により、地域的多様性が目立ってきた。ロシアを理解する際には、このような地域の均質性と多様性の両面を念頭に置くことが求められていると述べる。そして、「巨大な国土をもつロシア」の諸地域を概観し、近代以降のロシア拡大の歴史やソ連解体後の推移を概説する。本章は8ページだが、ロシアに関する基本的情報が要領よくまとめられている。

「2. 広大な国土と多様な自然」は、大学で地理学を学んだ後、水・物質循環の専門的研究を行い、ロシアの極東地域をフィールドにしている白岩孝行が執筆している。まずロシアの地形を、東ヨーロッパ平原、ウラル山脈、西シベリア低地、レナ川以東の安定大陸としての山岳地域、そしてロシアの変動帯に分けて概説する。次の気候・植生では、寒帯・ツンドラ、冷帯・タイガ、乾燥帯・ステップ、温帯・針広混合林に分け、さらにタイガとステップは独立した節で詳細に論じている。

「3. 開発の歴史、豊かな資源」は2人の執筆者が担当している。まず、米家志乃布が歴史地理学的な立場から、ロシア帝国のシベリア進出と植民都市の建設の特徴、ステップ地帯の交易路であるシルクロードの歴史と発展について解説する。次に、渡辺悌二が社会・生態システム的な立場から、ソ連時代の天然資源の開発、工業地域の分布、自然改造計画の特徴について概説する。最後に、アラル海の事例を中心にロシアの環境問題について掘り下げている。

「4. 世界の穀倉地帯—ロシアとその周辺：ウクライナ、中央アジア」は、シベリアを中心とする北方ユーラシア地域の民族、文化、生活などを文化人類学の立場から研究している吉田 陸が執筆している。まず、ロシア農業の特色、農業地域、特徴的な農産物、畜産について概説し、特徴的な事例地域を取り上げる。穀倉地帯であるウクライナの農業、中央アジアの綿花地帯、最後に、ソ連期の農業集団化体制、ソ連崩壊後の農業の変容などについて考察する。

5章から7章までは、ロシアの経済地理学的研究の第一人者である小俣利男が執筆している。「5. 産業化と工業地域の形成」では、ロシア工業の全体的特色を概観し、最新の統計を利用して、ロシアの主要な工業地域の事例を分析するとともに、社会主義時代の工業化の特色についても言及する。

「6. ハイテク化と資源依存」では、ソ連解体後の工業の変化、特にイノベーション、ハイテク産業を中心に検討する。また、今日のロシアが資源輸出型経済になっていることを指摘し、石油や天然ガスの輸送にかかわるパイプラインについて詳しく解説している。小俣が執筆した三つの章で

は、地図化された貴重な図版や統計が多く掲載されている。たとえば、ロシアの石油・天然ガス産地とパイプラインの図 (p.77) などは、執筆者がロシア研究の専門家であることを示す貴重な地図である。

「7. ポスト社会主義で変わる社会経済」では、ソ連解体後の市場経済化による巨大商業施設の出現、交通の発達、インバウンド観光の動向、多様化するサービス業などを論じ、さらに生活水準の向上と経済格差の増大に伴い、富裕層が出現し、ロシア社会の二極化が進行していることを指摘している。本章は、本書に収められている12の章の中で最も長い20ページを割いており、近年のロシア経済の急激な変化と現状を知るのにたいへん参考になる。

「8. 発達する都市—ロシア全域、モスクワ、サントペテルブルク」は大城直樹が執筆担当している。まず、ロシアの都市発達と都市の分布の特色について概観し、次に、社会主義型の都市の特色とそれが崩壊した後の都市の変容について解説している。そして首都モスクワと古都サントペテルブルクの事例を掘り下げ、両都市の発達と特性を詳細に考察しており、多くの読者が興味を持つ内容となっている。

「9. ロシアの伝統文化、人の暮らし」は、再び米家が執筆を担当している。ソ連崩壊後、ロシアの人々の生活は大きく変化したが、本章では、まずロシアの伝統文化として、ロシア正教の歴史的推移、ゴルバチョフ政権下のペレストロイカによる宗教の自由の保障後の変化などについて概説する。次にロシア料理について取り上げる。日本では、ロシア料理といえば、ピロシキやボルシチがよく知られているが、これらは本場のロシアでは、日本で食するものとは、実態はかなり違うようだ。米家は、ロシア料理の中で最も「ロシアらしい」ものとしてパン、特に黒パンをあげる。ロ

シアの伝統音楽については、日本で歌われているロシア民謡は、ロシアでいわれているロシア民謡とはかなり異なることを、具体例を挙げながら解説しており、非常に興味深い内容になっている。

次に、ロシアの人口が1992年以降、減少しており、その原因は少子高齢化にあると指摘する。また、ロシア人男性のアルコール摂取の過剰が平均寿命の短さの理由となっていることを紹介する。ソ連崩壊後のロシアの教育制度の変化についても論じ、ロシアの人々の日常生活、住宅事情、住居、余暇・レジャー、インターネット事情まで概説している。本章を読むと、ロシア人の生活ぶりがリアルに見えてくる。

「10. 多様な民族と地域文化」も再び吉田が執筆を担当している。2010年の国勢調査によれば、ロシアに占めるロシア人の割合は78%で、それ以外は多様な民族集団からなるとまず指摘する。多民族国家ロシアの背景について考察し、ロシアのユダヤ人やロマ人の問題についても説明している。次に吉田の専門であるシベリア遊牧民、中央アジアのイスラーム、およびカフカス三国(ジョージア、アルメニア、アゼルバイジャン)の暮らしと文化について、文化人類学的に詳しく紹介している。

評者がモスクワの華人社会を調査した際に、日本料理店が多い割に中国料理店が非常に少ないのに驚いた経験がある。吉田執筆のコラム「多民族国家ロシア—モスクワの民族料理店事情」では、日本料理店が急増しており、中国料理店の5倍近くあることを数字で示している。

「11. 日本、東アジアとの関係—ロシア極東地域」は、中国研究が専門の小野寺淳が担当している。バイカル湖周辺より東部の地域であるロシア極東地域を取り上げ、日本との歴史的関係、北方領土問題、極東地域の人口、産業、天然資源の開発などを取り上げる。次に極東地域を地域別にハ

バロフスク、沿海地域、サハリン州など9地域に分けて概観している。そして、環日本海経済圏と図們江開発、極東地域における中国との関係などについて説明している。

最終章である「12. 世界の中のロシア—EUとの関わり」は、ヨーロッパ地域研究を専門とする本書の編者である加賀美がEUとロシアとの関わりを論じている。そして、国境を隔てて隣接するEU加盟国のフィンランド、ラトビア、さらにロシアの飛地でEUに浮かぶ島、カリーニングラード州の近年の状況を紹介する。

本書を読み終えて、改めてロシアの国土の広大さを再確認させられた。大国ロシアを170ページあまりによくぞまとめきった、というのが評者の率直な感想である。各執筆者は、限られたスペースに、書くべき材料を苦勞しながら取捨選択したものと思われる。5章を除く各章には、執筆者ならではのトピックを取り上げたコラムが設けられ、ロシアの人々の暮らしぶり、地域の姿などが生き生きと浮かび上がってくる。

大学はもちろん、中学・高校の地理教員にとって、本書は、ロシア地誌の授業の最良の参考書であることは言うまでもない。評者は、地理関係者だけでなく、ロシアに関心をもつ研究者、学生、ビジネス関係者などにもぜひ本書を手にとってもらいたいと思う。本書からは、ロシアの全体像を総合的に把握できるとともに、広大なロシアの地域差とその背景、そしてロシアの現状についても、さらに理解を深めることができるはずである。そうすれば、社会一般の多くの人が中学・高校時代に抱いていた「地理」のイメージが変わるのではないだろうか。本書を読んでいただければ、「地理って、こんなに関心の幅が広く、奥が深い学問なんだ」と再認識してくれるに違いない。

(山下清海)

橋本雄一編：『二訂版 QGISの基本と防災活用』古今書院、2017年10月刊、191p., 3,000円(税別)

インターネットを中心とする技術革新や2010年代から世界的に注目されつつあるオープンデータ運動などの潮流から、デジタルな地理空間情報に接する機会が、多様化・多面化している。本書のタイトルであるQGISはオープンソース型の代表的なデスクトップGISソフトウェアとして世界的に利用されており、近年QGISの操作方法を兼ねた書籍が多岐にわたるテーマで相次いで出版されている(朝日ほか、2014; 今木・岡安、2015; 喜多、2017)。また、データサイエンス分野でも地理空間情報処理の特集として紹介されるなど(朝日・水谷、2016)、地理情報科学を越境したソフトウェアの認知度の向上に一役買っている。

このような現状を背景に、2015年10月に初版が刊行された本書は、基本的な操作解説に加えて防災活用にも着目し、2017年に二訂版を迎えた。QGISを始めとするオープンソース・ソフトウェアは開発環境や機能改善などの理由からバージョンアップの頻度が高い。したがって、最新版に対応するマニュアルや操作解説が追いつかないという声を耳にするが、本書は2017年8月にリリースされたLTR (Long term support: 長期保守) 版である2.18 (Las Palmas) に対応している。LTR版では約1年に渡りバグ修正が継続されるため、長期的に利用できる構成となっている。

初版に対する書評は、小林(2015)により本誌で丁寧に記載されているため再度論じるまでも無い。そこで、ここでは全体構成および初版からの改定部分と、本書を通読した上で浮かび上がってきた地理空間情報分野におけるオープンに対する課題について触れたい。

本書の構成は5部23章に加え、付録として、シェープファイルの文字コード変換やトラブル